

2024年12月15日(日)

文献班

田中禎昭(専修大学)

1. 高田報告の注目点(パワーポイント資料から)

- ・「高度な天文知識が背景」にある天文図⇒古代中国からの(天文図)移入の可能性
- ・西暦214年6月30日(ユリウス暦)の星空との関係
- ・そもそも星空であるのか、「確証バイアス」の可能性があるので検証が課題

☞「214年6月30日」という日付における「五天体会合」(火星・木星・土星・スピカ  
[おとめ座]・月[月齢5.1])が古代中国においてどのように認識されていたのか?と  
いう点に議論を絞り、コメント

2. 西暦214年前後における中国の天文記録

- ・西暦214年6月30日:後漢の献帝・建安19年5月6日(中央研究院・中西暦轉換)
- ・『後漢書』には建安19年5月に天体会合の記事はない。しかし、その1年前の『後漢書』建安18年条にはステラナビゲータの観察結果と同様の天文現象を示す記述がある

[史料1]『後漢書』献帝本紀・建安18年(213年)是歳条

(建安)十八年(略)夏五月丙申(213年6月16日)、曹操が自立して魏公となり、九錫を加えられた(夏五月丙申、曹操自立為魏公、加九錫)。(略)是歳、歳星(木星)、鎮星(土星)、熒惑(火星)がともに太微垣(たいびえん)に入る(是歳、歳星、鎮星、熒惑俱入太微)

※太微垣:五帝座(距星:しし座β星[デネボラ])・東蕃4星(おとめ座γ・δ・ε星、かみのけ座α星)・西蕃4星(しし座σ・ι・θ・δ星)・南蕃2星(左執法・右執法[おとめ座η・β星])で構成。北辰(天帝)の前庭(朝廷)を意味

・高田氏が指摘する214年6月30日(建安19年5月6日)の中国の星空

※214年時の後漢の都・許(現・河南省許昌市/34°02'13.9"N, 113°51'54.4"E)

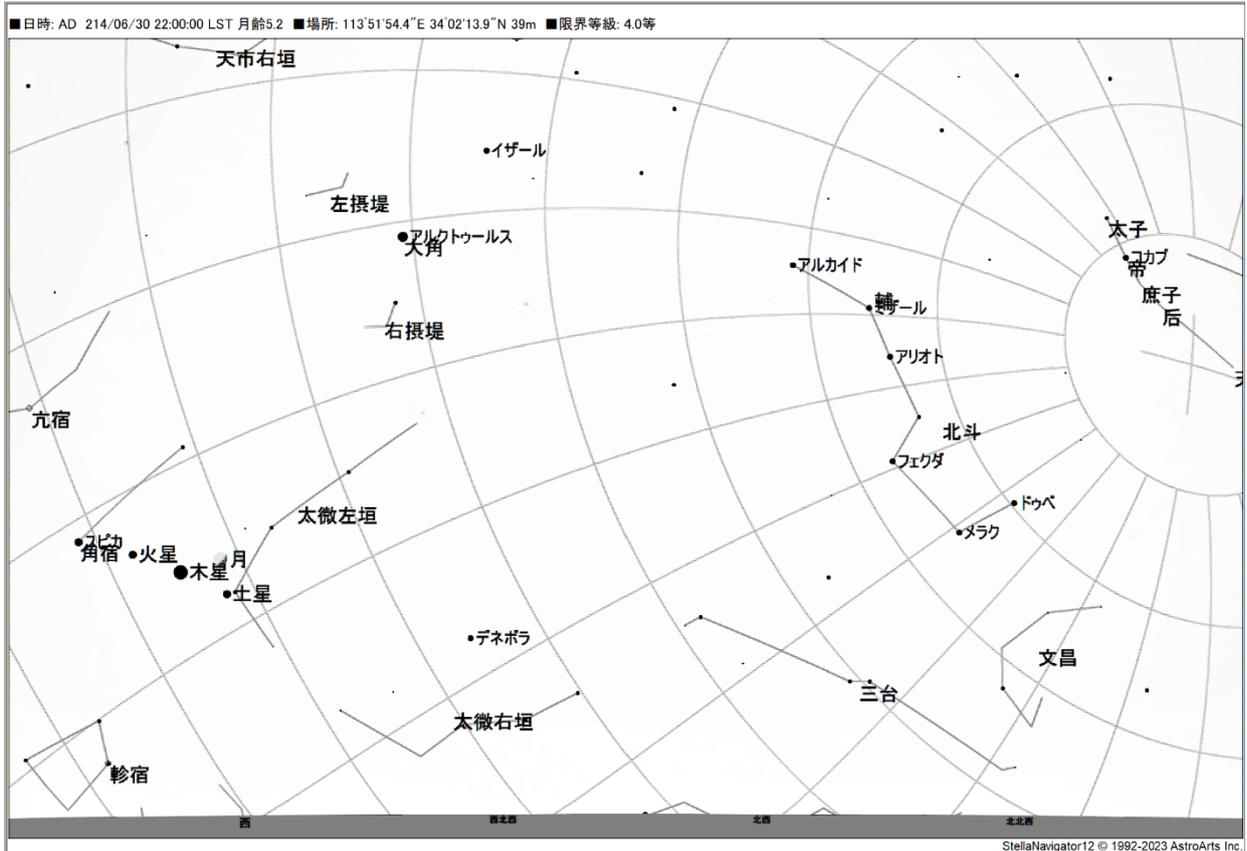
※日時:建安19年5月6日(214年6月30日)22:00

☞歳星(木星)、鎮星(土星)、熒惑(火星)が太微垣の軌道に入った状況が観察

・『後漢書』献帝本紀・建安18年(213年)是歳の天体会合は、『後漢書』天文志、『宋書』符瑞志にも登場⇒政治的意味をもつ古代中国の重要な天体现象と位置付けられている

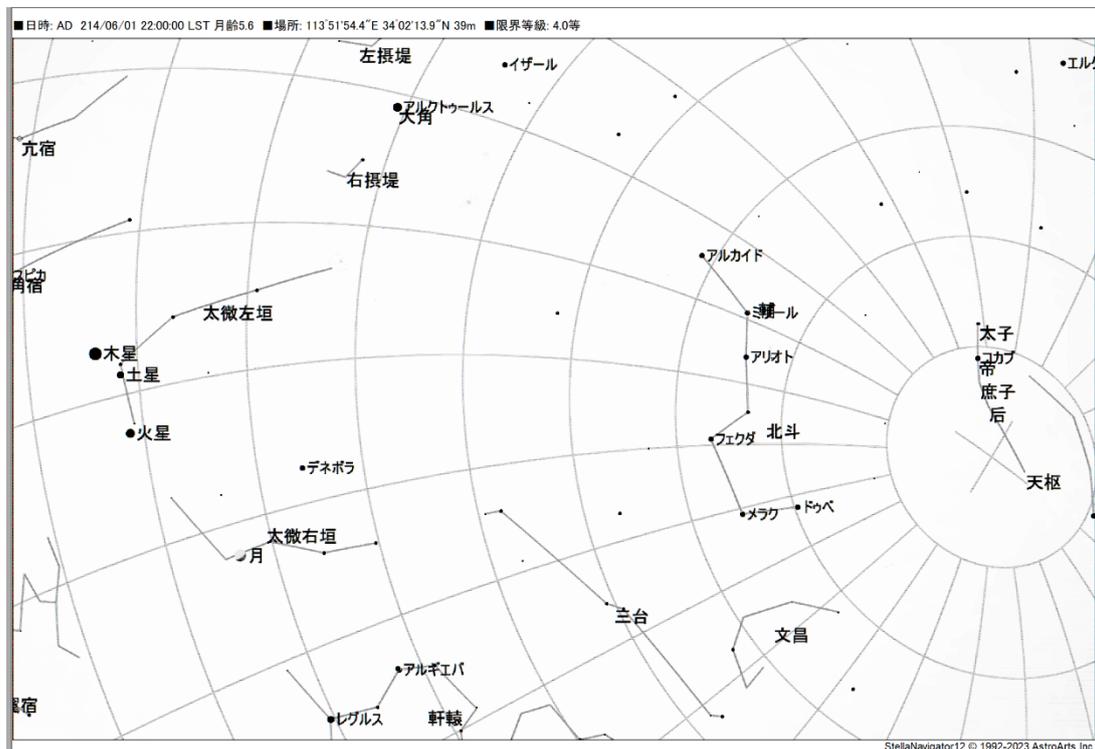
[史料2]『後漢書』天文志・下

(建安)十八年の秋、歳星(木星)、鎮星(土星)、熒惑(火星)がともに太微垣に入る。逆行して留まり「帝坐」を守ること百余日に及んだ。占に言う、「歳星(木星)が太微垣に入れば人主(君主)が改まる」(十八年秋、歳星、鎮星、熒惑俱入太微、逆行留守帝坐百餘日。占曰:「歳星入太微、人主改」)



※「帝坐」: 太微垣の中の「五帝座」(デネボラ) と考えられる

※ステラナビゲータでは、高田氏が指摘する 214 年 6 月に火星 (熒惑) の逆行が観測



[史料3]『宋書』符瑞志・上

建安十八年の秋、歳星（木星）、鎮星（土星）、熒惑（火星）がともに太微垣に入る。逆行して留まり「帝坐」を守ること百有余日に及んだ。歳星（木星）が太微垣に入れば人主（君主）の姓が改まる。鎮星（土星）が太微垣に入れば国内に兵乱があり、人主（君主）がそれによって衰弱する。この三つの天文現象は、漢の皇帝が姓を改め（王朝）交代を表す怪異である（建安十八年秋、歳星、鎮星、熒惑俱入太微，逆行留守帝坐百有餘日。歳星入太微，人主改姓。鎮星入太微，內有兵亂，人主以弱。三者，漢改姓易代之異也）

☞ **建安 18 年の天体会合現象は、後漢から魏への王朝交代（易姓革命）を天が示したもの**

☞ [史料1]『後漢書』献帝本紀は、曹操が自立して魏公となり、九錫を加えられるという王朝交代の妥当性について、天の意志である「易姓革命」を表す天体会合現象により証明  
※九錫とは？：漢～南北朝時代、皇帝より臣下に下賜された9種類の恩賞。前漢の王権を篡奪した新の王莽に下賜された「九命の錫」が原型。九錫の臣下への賜与は禅譲（平和的な王朝交代）の前段階と認識（石井仁「虎賁班劍考－漢六朝の恩賜・殊禮と故事」、『東洋史研究』59-4、2001年）

[史料4]『後漢書』鄧暉（しつうん）伝

鄧暉（字は君章）は汝南郡西平の人である。（略）成長すると『韓詩』や『嚴氏春秋』を研究し、天文や暦法に精通した。王莽の時代には賊が各地で蜂起していたが、鄧暉は天象を観察し占い、友人に嘆じてこう語った。「今、鎮星（土星）、歳星（木星）、熒惑（火星）は並んで天の川にあったが、翼宿（コップ座・うみへび座付近）・軫宿（からす座付近）の領域に分かれて去っては戻る現象を繰り返している。このことから、漢王朝は再び天命を受けるであろう。そしてその福は徳を持つ者に帰する。もし天に従い策を打つ者がいれば、かならず大業を成し遂げるだろう」（鄧暉字君章，汝南西平人也。（略）及長，理韓詩、嚴氏春秋，明天文歷數。王莽時，寇賊羣發，暉乃仰占玄象，歎謂友人曰：「方今鎮、歳、熒惑、並在漢。分翼、軫之域，去而復來，漢必再受命，福歸有徳。如有順天發策者，必成大功」）

※鄧暉：天文分野説や暦法に通じた名士。前漢王朝から王権を篡奪した新の王莽の時代、漢の復興を天文現象の観察から漢（後漢）の復興を予言。怒った王莽に獄に繋がれた  
☞ 建安年間の後漢から魏への王朝交代の予兆としての天文現象は、鄧暉が観察した新から後漢への王朝交代の予兆としての天文現象と同一のものとみなされた可能性

3. なぜ建安 19 年（ステラナビゲータ）ではなく、建安 18 年（史料）なのか？

・五帝座（デネボラ）を守る位置にある火星・木星・土星の会合、火星の逆行、太微垣との接近という現象は、建安 18 年にはなく建安 19 年にみられるもの

- ・『後漢書』は建安 18 年の「是歳」として月日を明示しておらず、建安 18 年 5 月の魏の曹操の自立（魏公に封ぜられる）記事に易姓革命を意味する天文記事がかけられている
- ⇒『後漢書』編纂段階（宋の時代）に、鄧暉によって観察された新から後漢（史料 4）への王朝交代の天文予兆の説を踏まえ、後漢から魏（史料 1～3）への王朝交代の予兆現象として 1 年ずらし記載し、曹操自立の記事に組み込んだのではないか？

#### 4. まとめ

- ・高田氏が注目した「214 年 6 月 30 日」における「天体会合」は、古代中国、とくに漢から魏晋南北朝時代にかけて王朝交代（易姓革命）の予兆としての天体现象を表している
- ・吉野ヶ里石棺の時代、まさに 3 世紀前半の魏王朝の成立（曹魏の自立）を予兆する特異な天文現象として古代中国において認識されていた可能性が高い
- ⇒当該星空の天文図が作られたならば、後漢から魏への王朝交代、すなわち魏公・曹操の自立を天が祝福して示した偉大な天文現象の記録として描かれた可能性がある